

2005年10月から2014年4月までに当院に発症から24時間以内に脳卒中の診断で入院された患者さんへのお知らせ

「急性期脳卒中例における直腸潰瘍に関する後ろ向き研究」に関する情報開示

平成26年6月16日
川崎医科大学附属病院
脳卒中科 青木淳哉

脳卒中には脳梗塞と脳出血があります。いずれも脳の組織の働きを障害し、後遺症をもたらす可能性がある病気です。後遺症には、“顔や手足のまひ、しゃべりにくさ”といった外見からわかるものばかりではなく、“排尿障害（尿が出にくい・尿意がわからない）”や“腸管の障害（吸収できない・便秘・下痢）”もあります。脳卒中による意識障害や麻痺の強い患者さんに対して、当院では急性期から積極的にリハビリテーションを行っています。しかし、脳卒中を起こしたばかりの時期では、脳の圧が高まったり、大きな血管が細かったりするために、十分に行えない場合もあります。そのような患者さんでは、口から十分なカロリーを摂取できないために栄養状態も悪くなることが多くあります。

脳卒中を来した患者さんに合併する腸管の障害の1つに直腸潰瘍があります。直腸潰瘍は腸管の障害と寝たきりの時間や栄養状態が関連しているといわれていますが、詳しい病態はわかっていません。我々は、直腸潰瘍の起こる原因を解明することは、脳卒中患者さんの後遺症を軽減させるために有用な方法の1つと考えています。そこで我々は、今まで当院に入院された脳卒中患者さんの診療データを調べ、直腸潰瘍の頻度とその特徴を考えようと計画しています。

対象は2005年10月から2014年4月までに当院に入院された発症24時間以内の脳卒中の患者さんです。診療で得られた採血・画像検査結果所見と脳卒中の重症度スケールや治療法を解析します。この研究で得られた内容を学会や科学雑誌で公表することについてご理解とご協力を頂きたいと存じます。患者さんの情報については個人名や個人を特定できるデータは伏せており、当院の個人情報保護規定に従って厳密に管理し、第三者が閲覧することはありません。また、この研究で患者さんは不利益を被ることはないと考えております。なお本研究は当院倫理委員会の承認を得ています。研究をするために必要な資金をスポンサー(製薬会社等)から提供してもらうことにより、その結果の判断に利害が発生し、結果の判断にひずみが起こりかねない状態を利益相反状態といいます。この研究では学内研究費のみを使用するため、この様な利益相反の状態にはなりません。この研究に対して、ご質問がある方は、下記担当者までご連絡ください。

担当 川崎医科大学 脳卒中医学 講師 青木淳哉
岡山県倉敷市松島 577 電話： 086-462-1111 (代)
Fax： 086-462-1199